100年経営の会

不変と革新の経営理念

地域フォーラム@三重

100年経営の会、モノづくり日本会議、日刊工業新聞社は2月14日「地域フォーラム@三重　不変と革新」を三重県四日市市の四日市ドームで開いた。長い歴史を持つ優れた企業が多数ある三重県において、100年経営の会会員企業と地元企業のトップらが登壇し、長期にわたり持続的成長を目指す経営のあり方を探った。同会場で13、14の両日開かれた「リーディング産業展みえ2013」との併催で、リーディング産業展の実行委員会と三重県が後援。県内外から250人以上の来場があり、講演・パネルディスカッションに熱心に聞き入るとともに、交流会では活発な意見・情報交換を行った。

三重県知事
鈴木 英敬 氏

「中今」の精神であすを開く

◇ あいさつ ◇

昨年第1回の地域フォーラムが大分・臼杵で開かれ、今回はモノづくり中小企業が集積する三重県で開催される。「不変と革新」がテーマだが、同義語で現在の三重県出身の松尾芭蕉の言葉「不易流行」がある。また不変と革新に通じるものを感じるのだが、今年は伊勢神宮で第62回の式年遷宮が行われる。1300年続く行事だ。これは「常若」といった精神で、神様に常にみずみずしい新しい環境にいていただこうとの考えに基づいている。正殿だけでなく、調度品に至るまで新しくし、その技術も伝承していく。

さらに神道には「中今」という考え方がある。今を一生懸命に生きる、前を向いて頑張るといった意味だ。「不易流行」「常若」といった考えのもとにも、将来を過剰に不安視したりせずに一生懸命頑張り、明日を開いていこうという中今の精神があると思う。100年経営の会の理念にも追加していただきたい。

私にとって北畑隆生会長は通商産業省（当時）入省時の初めての上司であった。これを縁に100年経営の会としても三重県の企業の皆さまのサポートもお願いしたい。

同時に行っているリーディング産業展みえは今年からBツーBを明確にし、企業同士が出会ってビジネスを生み出すことに特化している。フォーラムとともに三重県の素晴らしい企業をご覧いただき、新たな取引や成長のチャンスをつかんでいただきたい。

フォーラム登壇者ら

100年経営の会会員企業と地元トップらが、長期持続的成長を目指す経営のあり方を探った（三重県の四日市ドーム）

■講演「NOで入らず『まずやってみる』風土 技術でしたたかに生き抜く」

シンフォニアテクノロジー　社長
武藤 昌三 氏

当社は1878年に鳥羽造船所として発祥、創業は電気機械の試作に着手した1917年としている。現在日本で働いているのは連結で約3000人ぐらい。三重県には伊勢と鳥羽に工場がある。なんで100年も続いているのかはちょっとわからないのだが、昔からいろいろなことをやっている。何でもやってみようという気持ちがある。「NOから入らないでおこうや」という風土から、技術的に難しそうなもの、何か面白そうなものを何とかやってみようと、挑戦している。

基本的には「技術オリエンテッド」で売っていく。一つは高速回転機技術。もともと発電機なども作っていたので絶縁や巻線技術、電力の変換技術がある。また電気と磁力は裏腹というか、磁気回路技術もある。それから振動制御技術も。お客様第一で、求められる非常に多彩な分野、製品を生み出している。

ありたい姿描き「旗を揚げよ」

本日は不変と革新というテーマだが、「不易流行」という言葉をやはり使っている。変わらないことは変えてはいけない、変わらなくてはいけないものはきちんと変えていく発想で会社を経営している。中国の四書五経のなかの易経、とくに「易の三義」に学び社内の教育をしている。まず「変易」という言葉がある。同じ春は絶対来ないよということだ。もう一つ「不易」は春、夏、秋、冬が必ず来て同じ春は来ないけれども、この順番は決して逆にはならない、自然の法則は変わらない。さらに「易簡」は素直に世の中、大自然を見れば、いろいろなことが見えてくるはずということ。そうした中で教育としては直観力と洞察力をきちんと持てるよう進めている。

会社として目指す方向は、エコと海外。この二つの旗を掲げる。多彩な製品を作っているが二つはすべてに当てはまる。まずステートメントとして掲げる「ECOing」。2009年度には30％の製品がエコ関連だったが、これを20年度には70％の製品群としたい。グローバル展開についてはやはり09年度に10％しかなかったが、20年度には50％とする。

自然エネルギー関連では小型スマートグリッドで新しい製品を立ち上げている。電気自動車関連では急速充電関連に取り組んでいる。医療用、例えば認知症の早期発見システムなどの開発も進めている。

仕事を進める上では、ありたい姿を皆で描くことが大切だと思う。われわれは次にどこに進むのか、それは人から与えられるのではなく、自らつくるものだ。孫子の兵法にある「旗を揚げよ」に学び、ありたい姿を含めて旗を揚げれば人はついてくると考える。

やはり一番大事なのは人。後継者も含めてトップになる人材を育てようと、自分の名前をもじって「昌下村塾」を開いている。「龍を育てよう」を合言葉に上級管理職の研修をスタートしている。人は他では育ててくれない。自ら育てよう。

■講演「スエヒロEPMという企業」

スエヒロEPM　会長
佐久間 裕之 氏

今年創業60年を迎える企業で、あと40年先にこの企業があるのかは、私は見られないかと思う。ただ、今までの考え方や実績を踏まえていけば100年はおろか、200年続く企業になりうると信じている。主な製品はスクリュータイプの固液分離機で、天ぷら油やサラダ油といった食用油を原料の豆からしぼる機械だ。こうした機械はかつては日本になく、戦後間もなくの製油工場では外国製機械を使っていた。不況になり一つの工場を閉めようというとき、ある工場長がこの部門が消えるのは惜しいと考え、分離独立して「有限会社末広鉄工所」が1953年にスタートした。そこが今でも業務を営むスエヒロEPMの創業の地だ。

戦後多くの日本企業が発展していく中で末広鉄工所にも運が向いてきた。独立した製油会社の好意を得て、外国製品と並んで機械を使ってもらい、劣らぬ性能を発揮したのだ。地元なので部品供給もメンテもすぐできると、口から口に紹介していただいた。全国をまわり少しずつシェアを拡大していった。

私はこの会社に勤めてもう47年になるが、技術的に完全に理解できることは半分あるかという経営者だ。

モノづくりは〝サービス業〟

ただ考えているのは自社製品をオンリーワンにしよう、オンリーワンの企業になろうということ。何十年か前にオンリーワンという言葉を知っていたかどうかわからないのだが。

モノづくりの中で大事なのは、実験して結果を出すことだと思う。はっきりと目に見える結果を出せば、お客さまに納得いただける商品を生み出せる。しかし小さな企業で最も情けないのは研究開発をしたくても余裕や資金がなかったりすることだ。

そこで、顧客とともに開発する企業になっていこうと考えた。顧客の新しい製品化に向けたテストに協力し、場合によっては当社の機械も買っていただく。お客さまとともにというと格好いいが、少しずるいやり方だろうか。

そしてモノづくりといえどもサービス業であるということを忘れてはならない。創業者である父は亡くなって47年になるが「機械に魂を入れろ」と口が酸っぱくなるほど言っていた。どういうことか今もってわからない部分もあるが、要するにお客さまの本当の気持ちがわかっているかどうかで、作った機械は全然違ってくるということではないかと思う。機械も生き物のように扱って心を入れれば、普通の機械よりももっと働くはず、と創業者は言いたかったのだろう。

企業経営としては「自助努力」という言葉を重視している。中小企業もうまくいかなくなると政治が悪い、役所が悪いと周りのせいにしがちだが、そういった姿勢は嫌いだ。

また私は人とのご縁がいかに大切かと感じている。よく一期一会というが、「一期一生」という言葉を常に頭に置いている。今日ここで初めて会った方とも自分からは縁を切らず、死ぬまでお付き合いいただきたいと考えている。

コンテスト　テーマ

2030年の「心豊かなライフスタイル」

賞金総額100万円!

～未来のあたりまえを考える～

心豊かに、人間らしく生きるには、従来の考え方の延長では難しいものがあります。環境制約が厳しい将来を前提とするライフスタイルの設計と、そのために必要な技術を自然の中から見つけ出すシステムづくりが不可避と考えて、モノづくり日本会議「ネイチャー・テクノロジー研究会」は活動しています。その活動の一環として、2030年にあるべきライフスタイルのコンテストを開催し、ワクワク、ドキドキする未来の情景を幅広く募集いたします。

地球環境やエネルギーのことをふまえながら、ワクワク、ドキドキする未来の情景を描いてください!

http://www.cho-monodzukuri.jp/

協賛企業
NEC
Kao
SEKISUI
DNP 大日本印刷
日本リファイン

■募集内容：あなたが考える2030年にあるべき、心豊かなライフスタイルを300−400字程度にまとめてください。理解しやすいようにイラストや図表、写真のいずれかを付けてください。（著作権の扱いは上記サイトをご覧ください）
■募集期間：2013年1月15日（火）～4月5日（金）（Webでは当日必着、郵送では当日消印有効）
■応募対象：子どもからおとな、専門家まで。グループも可。
■審査委員：
審査委員長 石田 秀輝 氏 東北大学大学院教授
涌井 雅之 氏 造園家 東京都市大学教授
小池 一子 氏 クリエイティブ・ディレクター
高橋 正実 氏 MASAMI DESIGN 代表
木村 文雄 氏 積水ハウス 総合住宅研究所所長
下村 政嗣 氏 東北大学教授 バイオミメティクス研究会会長

■発　　表：5月下旬　日刊工業新聞社の新聞紙面、Webサイトなどで
■授 賞 式：6月下旬　（東京で開催するシンポジウムで表彰予定）
■賞金総額：100万円
※協賛企業から各賞が贈られます。

モノづくり日本会議

お問い合わせ E-mail：contest2030@media.nikkan.co.jp　Tel.03-5644-7608　主催 モノづくり日本会議 ネイチャー・テクノロジー研究会